

## 似たような話

『幕末三国志』を読み始めた。山学同志会の創立者で、日本山岳協会会長、日本山岳文化学会初代会長などを歴任、2012年の今年、米寿を迎えられる斎藤一男さんの著作だ。B6版で500ページに近い大冊だ。タイトルの「似たような話」については、本文の最後の方で触れる。前半はタイトルとは無関係の、斎藤さんとの関わりやら、なんだかんだ昔話になる。

東京理科大学を中退したことは、折にふれて書いたりしゃべったりしているので、知っている人は知っている事実である。中退前後、ぼくが二十歳の頃、大変お世話になったのが斎藤一男さんであり、奥さんの富美子さんだ。その頃のぼくは、斎藤家の居候だったのだ。

『幕末三国志』の巻末の肩書きに、「登山家、山岳文化研究者」とあり、数多くの著作がある。ぼくが今でも座右に置いている一冊は、『日本のアルピニズム』である。斎藤さんとの出会いがなかったら、「モノを書く」ということと出会うことはなかったのではないか、それくらいの恩人である。

山学同志会という会名がいい。ネーミングの重要性を教えてくれた最初の名前がこれだ。ぼくは昭和山岳会会員、昭和山岳会の機材置き場が平井にあり、斎藤宅も平井にあった。斎藤さんは山学同志会の創立者だったから、斎藤宅が山学同志会の事務所だった。

昭和山岳会にも年森靖さん、森田格さんをはじめとしてサムライが多かったが、山学同志会にもサムライが多かった。筆頭は小西政継さんだ。当時、山岳会は登山学校であった。いや、学校というより人生を学ぶ道場であったと思う。ぼくは自分の山岳会の先輩だけでなく、斎藤宅に居候できたおかげで小西さんとも言葉を交わすことができた。人と人とが直接触れあうことができた、いい時代だった。

過日、ぼくの手許に一通の案内状が届いた。斎藤一男さんと富美子さんの米寿のお祝いの案内だ。その日に先約があつて出席することができない。どうしようと思ったぼくは、平井に行くことを決めた。斎藤宅を尋ねて、斎藤さんと富美子さんの顔を見て、直接、米寿のお祝いを伝えようと思ったのだ。

10月4日午後2時前、ぼくは平井のホームに降り立った。何十年ぶりだろう。いやあ、平井駅前は大都会だ。平井行きを決めたのは、富美子さんの顔が見たかったからでもある。一男さんとは、山がらみのパーティーなどでお会いすることもあるのだが、富美子さんとはお会いするチャンスがない。何十年ぶりかで斎藤宅に上がり込み、一男さん、富美子さ

んと昔話しに花を咲かせたひとときは楽しかった。帰り際に頂いたのが、『幕末三国志』だ。本の帯には、「“勝てば官軍”のつくられた維新史から、夢と希望、野望と硝煙うずまくもう一つの維新史へ」とある。登山史ではなく、維新史。凄い、斎藤さんは山を越えてしまった。

いまぼくは、赤川次郎を夢中になって読んでいる。その合間に『幕末三国志』を手にとって、パラっとページをめくってみた。

「九州は日本の南端で、潮流によって最初に外国と接触する位置にある」。素直な書き出しで、抵抗なく文章に引き込まれた。赤川次郎の方をパタンと閉じる。もちろん、お堅い斎藤さんの漢字の多い、固い文章である。三毛猫ホームズなら一時間で一冊読み上げられるが、幕末・・・は軽やかには読み進めない。ようやく 56 ページ目に入った。冒頭に 500 ページ近い大冊と書いた。本文は 8 ページから始まって 494 ページに終わるから、実際は 487 ページのうちの 58 ページだ。

55 ページに、「嘉永二年（1849）イギリス軍艦『マリナー』が江戸湾口城ヶ島沖に出現した」。マリナーは下田に入港する。下田は、葦山代官江川太郎左衛門の支配地だ。江川はマリナーを訪艦する。江川は艦内の見学を許され、精強な銃砲を見た。飲食器物まで善美を尽くしてあるのを見て、幕府がとても敵対できる相手ではないと報告。

老中が、三奉行、両目付、長崎・浦賀両奉行から異国船に対する意見を聴取したところ、沿海警備の増大には耐えられないから、打払令に復旧せざるを得ないというのが多数意見、とまあそんな話しを読むと状況を全然把握していないなど、思ってしまう。

浦賀奉行が沿岸各砲台を巡検してみると、非常にお粗末で「すべての台場の守備については、幕府は厭わず出費することが何よりも必要」と結論。意見書を受け取った幕府は、砲術家などを含めた七人の委員を任命して、沿岸防備の現状を巡回視察させたところ、「浦賀周辺の防備はこれ以上増強の必要はない、これを維持するだけで事足りる」と報告してきた。「立場の違いや時局認識と責任感とで、こんなに差があるとは驚きだ」とは斎藤さんのご意見であるが、誰もが同感するところであろう。

原発、尖閣、・・・「似たような話」だと思いませんか？

『幕末三国志』の本筋とはまったく関係ない話して恐縮だが、天下泰平の世が長く続くと危機が危機として感じられなくなってしまうのだろうか。

さて『幕末三国志』、ここまでも面白いのだから、この先、益々面白くなりそう。パソコンに向かうのはこれくらいにして、読書にもどることにしよう。